

日本の伝統的園芸植物としての ツツジ類の歴史について

The Azalea's History as a Traditional Japanese Garden Plant

大出 英子
(Eiko OIDE)

I. はじめに

日本には、「クルメツツジ」や「江戸キリシマ」「ヒラドツツジ」「サツキ」など、古くから栽培・改良されてきたツツジの園芸品種群が数多く存在する。それらのツツジ類は、庭に植えられたり、春には日本各地でツツジ祭りや品評会などが開催されるなど、古くから日本人に馴染みがありよく知られている植物だが、数百年にわたる自然交雑や人為的交雑、人為的移動などが複雑に絡み合い、しかも詳細な記録が少ないなど、品種群の成立については不明な点が多い¹⁾²⁾。また、それぞれの品種群が地域的に独自の発展をとげ、中には門外不出にされていた種類もあるなど、品種群の成り立ちや、他品種群との関係性などについても不明な点が多い^{3) 4) 5) 6)}。さらに、昭和40～50年代をピークに人気は衰え、消えていった品種も多い。

このような状況は、ツツジだけでなく日本の伝統的園芸植物全般に共通することで、古典園芸書などには数多くの品種が記載されているが、歴史の変遷を経て品種が減少・消滅した種類や、品種群の起源や成り立ちが不明であるために、再生修復できない種類も少なくない。

筆者は伝統的園芸植物の消滅は貴重な遺伝資源の喪失であり、同時に日本の園芸文化と技術にとって大きな損失であると考え、日本の園芸文化や品種の継承と、新たな遺伝資源の再発見を目標に、伝統的園芸植物の成り立ちとその歴史について研究を行っている。

今回は、ツツジ類の園芸植物としての成り立ちについて報告する。

用語の定義

日本には野生のツツジと、古くから栽培・改良されてきた園芸ツツジがあり、似たような名称を多用したり重複したりするなど、分類的にも紛らわしく、理解しにくい状況にある。そこで、以下のような定義を設けることにした。

- ・野生種については、サツキ、マルバサツキというように括弧を用いず、カタカナで表記する。
- ・品種群の総称には、「サツキ」「キリシマ」のように「 」をつける。
- ・品種名には、「金采」のように品種名に ‘ ’ をつけて表記する。
- ・ツツジと表記した場合は、特定の種しゅを表すものではなく総称として用いる。

Ⅱ. 日本の野生ツツジと園芸ツツジ

(1) 日本の野生ツツジ

ツツジ科 (Ericaceae) ツツジ属 (*Rhododendron*) は、大きく「ツツジ類 (Azaleas)」と「シャクナゲ類 (Rhododendrons)」に分けられる。

シャクナゲ類とは、主にシャクナゲ亜属の、大型で厚く硬い革質の葉を持つ常緑性の植物群で、枝の先端にくす玉状に花が集まって咲く種類が多い。ツツジ類とは、シャクナゲ類以外のツツジ属植物を総称して呼び、比較的小型で、常緑性と落葉性がある。花は、樹全体を覆うように咲く。

日本は中国に次ぐツツジ属植物の宝庫と言われ、ヤマツツジ (*Rhododendron obtusum* var. *kaempferi*) やサツキ (*R. indicum*) などの常緑から半常緑性ツツジ類、ミツバツツジ (*R. dilatatum*) やレンゲツツジ (*R. japonicum*) などの落葉性ツツジ類、アズマシャクナゲ (*R. degronianum*) やヤクシマシャクナゲ (*R. yakusimanum*) などの常緑性シャクナゲ類 (シャクナゲ亜属) など、約50種の多種多様な野生種が分布している。(表1)

(2) 日本の園芸ツツジ

ツツジ属植物には花の美しい種類が多く、日本だけでなく世界中で栽培・観賞されている。欧米では、花や枝振りが大柄なシャクナゲ類を中心に園芸化が進んだが、日本では、常緑から半常緑性で低木性のツツジ類を中心に園芸化が進んだ。

「園芸ツツジ」とは、それらの栽培化され、品種改良されたツツジ類をさす。

園芸化されたツツジ類は、長い間、何世代にもわたり交雑が行われ、遺伝的にも性質的にも原種とは異なるため、植物分類学とは別の園芸的な分類名を用いることが多い。

日本の園芸ツツジには、「キリシマ」や「江戸キリシマ」、「クルメツツジ」、「ヒラドツツジ」、「サツキ」などがあり、これらは、複数の種が交雑した品種群である。

それぞれの園芸ツツジについては「Ⅳ. 主な園芸ツツジの特徴と成り立ち」で述べる。

Ⅲ. 歴史の中のツツジ

(1) 古辞書のツツジ

ツツジが登場する最も古い書物は『出雲風土記』(732)で、大原郡の項に各地の山野にある植物の名があげられ、その中に「茵芋」として記されている。この中では、ツツジは観賞植物としてではなく、生活に根ざした身近な植物として記されている。

「茵芋」はツツジの中国名で、わが国最古の漢和辞書である『新撰字鏡』(昌住著898~901)では「茵芋 岡豆々志 又云伊波豆々志」と、『倭名類聚鈔』(源順著934)では「茵芋 本草云茵芋二音和名仁豆 一云乎加豆々之」と説明されている。また、『倭名類聚鈔』の中には、「羊躑躅」はイワツツジ別名モチツツジ、「山榴」はアイツツジとの説明もされている。

当時の「ツツジ」の名称は今日の植物分類学上の種名を表すものではなく、野山に生えるの

表1 日本の主なツツジ属 (*Rhododendron*) 植物の分類体系※

属	亜属	節	亜節	列			
ツツジ属	ゲンカイツツジ亜属				ゲンカイツツジ	<i>R. mucronulatum</i>	var. <i>cilliatum</i>
	ヒカゲツツジ亜属	サカイツツジ列		サカイツツジ	<i>R. lapponicum</i>	subsp. <i>parvifolium</i>	
		ヒカゲツツジ列		ヒカゲツツジ	<i>R. keiskei</i>		
	バイカツツジ亜属						
		セイシカ節		セイシカ	<i>R. latoucheae</i>		
		トキワバイカツツジ節		トキワバイカツツジ	<i>R. uwaense</i>		
		バイカツツジ節		バイカツツジ	<i>R. semibarbatum</i>		
	ツツジ亜属						
		コメツツジ節		コメツツジ	<i>R. tschonoskii</i>		
		モチツツジ亜節					
			ケラマツツジ列		ケラマツツジ	<i>R. scabrum</i>	
			モチツツジ列		モチツツジ	<i>R. macrosepalum</i>	
					キシツツジ	<i>R. ripense</i>	
				チョウセンヤマツツジ	<i>R. yedoense</i>	var. <i>yedoense</i>	
		ヤマツツジ亜節					
			ウンゼンツツジ列		ウンゼンツツジ	<i>R. serpyllifolium</i>	
			サツキ列		マルバサツキ	<i>R. eriocarpum</i>	
					サツキ	<i>R. indicum</i>	
			ヤマツツジ列		シナヤマツツジ	<i>R. simsii</i>	
					オオヤマツツジ	<i>R. transiens</i>	
		アシタカツツジ			<i>R. komiyamae</i>		
				サタツツジ	<i>R. obtusum</i>	var. <i>obtusum</i>	
				ヤマツツジ	<i>R. obtusum</i>	var. <i>kaempferi</i>	
				フジツツジ	<i>R. tosaense</i>		
				ミヤマキリシマ	<i>R. kiusianum</i>		
	クロフネツツジ亜属(ミツバツツジ亜属)						
		クロフネツツジ節		クロフネツツジ	<i>R. schlippenbachii</i>		
		シロヤシオ節		シロヤシオ	<i>R. quinquefolium</i>		
		ミツバツツジ節					
			サクラツツジ列		サクラツツジ	<i>R. tashiroi</i>	
			オンツツジ列		オンツツジ	<i>R. weyrichii</i>	
			ミツバツツジ列		ミツバツツジ	<i>R. dilatatum</i>	
	トウゴクミツバツツジ列		トウゴクミツバツツジ	<i>R. wadanum</i>			
	コバノミツバツツジ列		コバノミツバツツジ	<i>R. reticulatum</i>			
ムラサキヤシオツツジ亜属(レンゲツツジ亜属)							
	レンゲツツジ節		レンゲツツジ	<i>R. japonicum</i>			
	ムラサキヤシオツツジ節		ムラサキヤシオツツジ	<i>R. albrechtii</i>			
	オオバツツジ節		オオバツツジ	<i>R. nipponicum</i>			
	アカヤシオ節(アケボノツツジ節)		アカヤシオ	<i>R. pentaphyllum</i>			
シャクナゲ亜属							
		ハクサンシャクナゲ列		キバナシャクナゲ	<i>R. aureum</i>		
				ハクサンシャクナゲ	<i>R. brachycarpum</i>		
		シャクナゲ列		アズマシャクナゲ	<i>R. degonianum</i>		
				ヤクシマシャクナゲ	<i>R. yakusimanum</i>		
				エンシュウシャクナゲ	<i>R. makinoi</i>		
				(ホソバシャクナゲ)			

※: 7)をもとに改定

で「オカツツジ」、岩の多い場所に生えるので「イワツツジ」、花色が赤いので「ニ（丹）ツツジ」、白いので「シラ（白）ツツジ」、花や葉に粘りがあるので「モチツツジ」など、自生地環境や植物の性質を表し便宜的に用いられたもので、数種類の総称であったり、地方によって、あるいは時代によって呼び名が異なるなどしていた。

（2）万葉集のツツジ

『万葉集』（771～790）では、

「水伝ふ 磯の浦廻のいわ石つつ乍じ自 もく咲く道を また見なむかも」 2一八五

「細領布の 鷺坂山のしら白つつ管じ仕 さとし吾に染はね 妹に示さむ」 9一六九四

などと詠まれ、ツツジは「乍自」「管自」「管仕」「管士」などで表されている。

「水伝ふ…」は、池の際に植えられていたツツジを詠んだ歌といわれ、その時代にはすでにツツジの観賞性を評価し、造園的に用いられていたと考えられている¹⁾。

ツツジの種類としては、古辞書同様、「イワツツジ」や「シラツツジ」、「ニツツジ」、「イハツツジ」などが記している。身近なところで入手可能なツツジ類を植栽し、観賞していたと考えられる。

（3）平安、鎌倉、室町時代

『源氏物語』（紫式部著1010代）の『乙女』の巻には、六条院にある紫の上の住居の庭の描写として、

御前ちかき前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、石つつじなどやうの春のもてあそびをわざと植ゑて…（後略）

とある。このことから、この時代、庭には季節の植物が計画的に植栽され、ツツジは春を演出する代表的な植物の1つとして評価されていたと考えられる。

また、藤原定家の日記『明月記』（1180～1235）には「八重咲きのツツジが挿し木で殖やされ献上品にされた」と、無住道暁の説話集『沙石集』（1279）には「八重咲きは貴重なもの」と記されている。江戸時代以降の日本では、異形のものや希少なものを貴ぶ園芸文化が見られるようになるが、平安や鎌倉の時代に、すでに、花の価値に観賞性だけでなく希少性に価値を見出していたことがわかる。

さらに、『沙石集』には「尾州に山田次郎といひし人、所領内の山寺に八重つつじ有けるを、ほしく思ひてありしに、彼の僧、大なるとがありてまどうべき事ありけるに、藤兵衛尉という検断に仰付て、この科料に七匹四丈の絹をや参らす、八重つつじをやまいると下知しける。其の僧、七匹四丈をこそ参らせめ、此つつじをもて心を慰め候へばと申けるを、主人の心を知る故、それにては不審のこるべし、唯つつじをまいらせ給へといひければ、力なく掘りて参らせぬ。」との記述があり、その時代にもマニア（蒐集家）がいたことがわかる。

1300年代から1400年代になると、ツツジを庭に植えることは一般化していたらしく、ツツ

ジを集めて庭を造るということも行われるようになった。現在、つつじ公園として広く知られる群馬県館林市の「花山公園」の由来は、建武元年（1334）に新田義貞が勾当内侍こうとうのないしのために新田郡南田島郷宮下又太郎旧城址（現在の群馬県新田郡）に建てた御殿で、様々なツツジを数多く取り寄せて庭に植えたと言われている。この庭園に植えられたツツジは、寛文四年（1627）に館林に移植され、現在の花山公園の基礎となっているが、この公園は現存する最古のツツジ庭園であり、園内に残るツツジ古木の種類は主として関東に広く自生するヤマツツジ系とオオヤマツツジ系である。また、同時代の京都の庭に見られるのは、京都周辺に分布するヤマツツジやモチツツジであることから、この時代は、主に周辺に分布する自生種を集め庭に植えたものと推測する。

（4）江戸時代

江戸時代は園芸の黄金期と言われ、ツバキ、サクラ、ボタン、変りアサガオなど、様々な園芸植物とたくさんの品種が生みだされた。この時代にツツジの人気も爆発的に高まり、書物の中に表れる品種の数も急激に増えている。

江戸時代には、江戸城を中心に大名屋敷、旗本屋敷、神社仏閣などが造営され、庭園も造られた。それにともない、庭に季節の変化や彩りを取り入れようと様々な観賞性の高い植物が植えられた。また、初代、二代、三代と花好きの徳川将軍が続き、将軍に取り入ろうとする大名や藩士、その下の庶民まで園芸熱が高まったとされる。

この時代、参勤交代の制度とともに、江戸の屋敷には遠く離れた領地から珍しい植物が持ち込まれ、江戸の街には日本中の植物が集まってきた。それと同時に、江戸から地方にも、ものや情報が流れるようになった。藩によっては、地域の貴重な植物と技術を守るために門外不出の「お留花とめはな」としたところも多い。

延宝九年（1681）には、日本最古の園芸書として知られる水野元勝の『花壇綱目』が出され、ハナショウブやカキツバタ、アラセイトウなどの草花とともに、ツツジ類が147品種あげられている。中には「キリシマ（切嶋）」も15品種含まれている。

武家の庭には「鶴亀」や「真行草」を表す刈り込みがあり、常緑低木で刈り込みに向くツツジ類の人気が高まった。また、庭園を管理する植木屋が栄え、植木業が産業として確立した。植木屋は庭の管理だけでなく、生産や育種まで行うようになっていた。

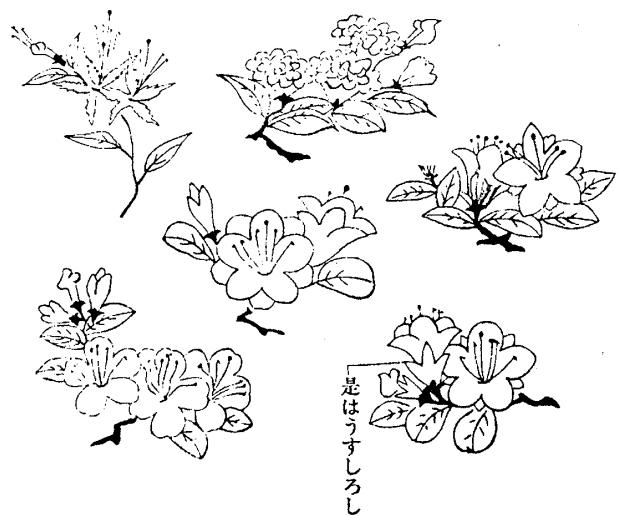


図1 『錦繡枕』のキリシマ品種図（一部）

元禄五年（1692）に、江戸染井（現在の豊島区巢鴨）の植木屋であった伊藤伊兵衛が『錦繡枕』⁸⁾を出す。伊藤家は三代目の頃には「きり嶋屋猪兵衛」や「つつじ屋猪兵衛」と呼ばれるほどツツジ類の収集、栽培、普及に大きな影響を与えた人物で、『錦繡枕』には、ツツジ174品種、「サツキ」161品種について、実物大の図入りで花型や葉の特徴、花色などの品種の特徴が解説されている。「キリシマ」は18品種があげられている。

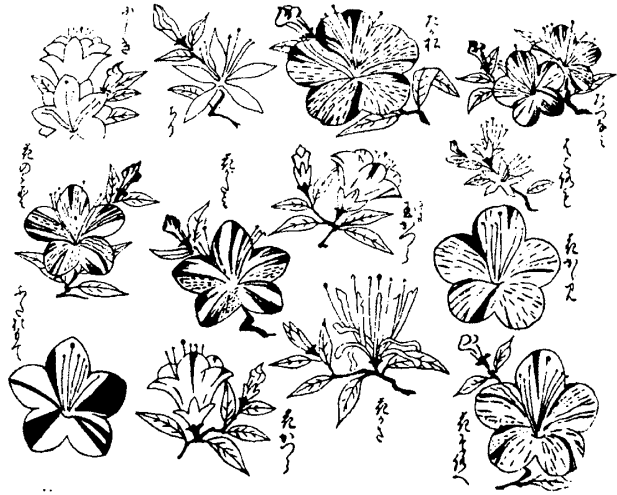


図2 錦繡枕に描かれたサツキ品種図（一部）

染井には数多くの植木屋が集まり、店を開き、こぞって「江戸キリシマ」を殖やし、藩邸や武家屋敷に広めた。

江戸の庶民の多くは庭がなかったので、江戸の庶民のガーデニングは、もっぱら鉢植えの花を並べ育てることで、花の季節には、花の名所を訪れ花見を楽しんでいた。植木屋はツツジをはじめとする数々の庭木を植えた栽培圃場を一般公開し、客を呼び込むために店頭には鉢物を並べた。その効果もあって、ツツジの花の季節には、染井の植木屋は見物客で賑わい、飛鳥山の桜と並ぶツツジの名所となった。

江戸中期になると、下級武士たちは藩からもらう棒給では生活できなくなり、副業として園芸を始めるものが出た。伊賀組百人鉄砲隊の同心屋敷があったことからその地名のある大久保百人町では、染井の繁栄にあやかって「江戸キリシマ」の栽培を大々的に始めた。大久保百人町には東西北の三区に分けた広大・肥沃な農地があり、その2ヶ所に大規模な花の展示園（花木園）を設けた。ここで誕生した名品に「日の出霧島」があり、現在も人気が高い品種である。

江戸の初期は、植木屋が大規模に生産を行っていたが、中頃から武士などが、単価の高く大きな面積を必要としない奇品珍品の鉢物を中心に、副業として生産を行うようになった。¹¹⁾

（5）江戸時代後

江戸時代に爆発的なブームとなったツツジ類だったが、幕末の世情混乱と明治維新の影響、生産の中心が地方に移ったこと、東京の市街化が進み庭木としての需要が減ったことなどが原因し、江戸のツツジ類栽培は衰退していく。

染井の植木屋は、天保以降（1830～）の抑圧政策と幕末の混乱で減少し、明治20年（1887）頃から急速に姿を消した。染井のツツジ個体は、その多くが大久保百人町に移された。

大久保は明治維新の影響が少なく、明治に入って染井をしのぐほどに発展し、明治の末期まで繁栄したが、明治36年（1903）の日比谷公園開設の際に大量のツツジが買収・移植されたこ

とをきっかけに、市街化の波に押され姿を消していく。大久保のツツジ個体は、館林の花山公園に移植された。

その一方で、九州のクルメツツジやヒラドツツジ、埼玉県安行や栃木県宇都宮のサツキなど地方の生産地が勃興し、明治末期から第二次世界大戦直前、大戦後から昭和50年代に再びツツジ類の人气が高まった。このブームには欧米の人工交配や栽培技術の導入、園芸植物の輸出入などが影響している。

IV. 主な園芸ツツジの特徴と成り立ち

「キリシマ」

「キリシマ」とは、江戸時代に鹿児島県霧島山から採集されたツツジ個体をもとに改良された品種群のことで、江戸を中心に栽培・改良された「江戸キリシマ」と、久留米地方で栽培・改良が進んだ「クルメツツジ」とに大別される。

『続江戸砂子』（菊岡沾淳著1735）には、「霧島は薩摩国霧島山の産木なれば此の名あり。正保年中（1644～1648）薩州より大阪へ一本来る。取り木に取て大阪より五本京に登る。^{なづけ}号て『富士山』『鱗角』『面向』『無三』『唐松』と呼ぶ。『富士山』『鱗角』の二種は禁庭に植えさせられたり、残る三種は明暦二申年（1656）武江染井に下す。それより接木挿枝として数々に分れ諸国にひろめたり。右三本の元木今は古木となりておのれとはびこり春毎に開花猶色をまされり。」と、「キリシマ」が正保年間（1644～1648）に鹿児島から大阪、京を経て江戸に至り、江戸から日本各地に広がっていった経緯が記されている。

「キリシマ」の花は直径3～4cmの小輪で、枝先に10輪以上の花が多数集まって咲くため、花の時期には植物全体が花で覆われたようになる。花色は紅、淡紅、白系で、二重咲きの品種も含まれる。古くから日本庭園に植えられ観賞され、4月下旬～5月上旬に日本各地で開催される「つつじ祭り」の多くで、今もその花を見ることができる。

霧島山では、頂上部にはミヤマキリシマ、標高が下がるにつれヤマツツジ、サタツツジに植生が推移し、それぞれの分布が重なるところでは、自然交雑による中間型が見られる。「キリシマ」の起源は、霧島山のヤマツツジからの選抜個体とされるが、ヤマツツジの花は一般的には直径4～5cmの中輪で「キリシマ」よりも大きく、また花色も薄いため、より花径が小さく花色の濃いサタツツジ（ヤマツツジの変種）とする説も多い。しかし、色素分析による研究では否定的な報告がされている²⁾。

『花壇綱目』（水野元勝著、1681）の下巻には「ツツジ異名のこと」としてツツジ類147種が記され、その中に‘霧島’‘とよきり嶋’‘紫きり嶋’‘しろきり嶋’‘大きき嶋’など「きり嶋」がつく品種が15種類挙げられている。この園芸書は「キリシマ」が江戸の染井に入った25年後に発行されたもので、その25年の間に品種が15品種まで増えたことが示されている。



図3 キリシマ系ツツジの成り立ちと経路

「江戸キリシマ」

「キリシマ」のうち、京都を経由して江戸に入り、江戸の染井や大久保百人町で生産・品種改良された地方品種群を「江戸キリシマ」と呼ぶ。『花壇綱目』や『錦繡枕』に記された「切嶋」「きり島」系品種は「江戸キリシマ」に分類される。DNA解析では、数品種を除き全てヤマツツジ型のDNAパターンを示すことが報告されている¹⁾。

江戸時代には江戸の街中に花の名所が数多くでき、季節の花々を庶民が楽しんだ。染井や大久保百人町などで盛んに栽培されていたのは「江戸キリシマ」であることから、『江戸名所花暦』などの花の名所案内にあるツツジの多くは「江戸キリシマ」であったと考えられる。



図4 江戸キリシマ「白霧島」

「クルメツツジ」

「クルメツツジ」は、久留米地方で発展した「キリシマツツジ」の地方品種群で、江戸時代末期の天保年間（1830～1844）に、久留米藩士の坂本元蔵が「江戸キリシマ」をもとに品種改良したのが始まりとされる。

坂本元蔵の作出した品種は、藩主の有馬頼成によって門外不出の「お留^{とめ}花^{ばな}」とされたが、明治の中期にその禁が解かれた。はじめの頃は「小霧島」「霧島つつじ」などと呼ばれていたが、

「お留花」が解かれ、明治28年（1895）に久留米出身の商人吉村長平らが明治天皇に献上した頃から「久留米の躑躅」として知られるようになり、明治36年の内国勸業博覧会に赤司広楽園が「特産クルメツツジ」の名で出品したことをきっかけに「クルメツツジ」が定着し広く知られるようになった。

「クルメツツジ」は花色が紫、淡紫、紅紫、桃、淡紅、紅、白と幅広く、色鮮やかな品種が多い。花は直径3～4cmの小輪で、1枝に10～20花がまとまって咲き、花期には樹全体が花で覆われるようになる。また、二重咲きの品種が多いことも特徴のひとつとして挙げられる。現在までに約700品種が作出されたが、現存するのは約300品種とされている。

品種群の成立には、「江戸キリシマ」、サタツツジ、ミヤマキリシマなどが関係しているといわれ、DNA解析では、ヤマツツジ型のDNAパターンを示す系統と、ミヤマキリシマ型のパターンを示す系統があることが報告されている¹⁾。



図5 クルメツツジ「浮橋」

「ヒラドツツジ」

「ヒラドツツジ」は長崎県平戸市の武家屋敷の庭で自然発生した交雑種を選抜した品種群で、花の大きさは直径6cmの中小輪から15cmを超える巨大輪まである。多くの品種は8～10cmの大輪で、樹高は2～3mとツツジの中では際立って高く、樹形、葉形、花形ともに最も大型のツツジといわれている。約200品種あり、花色は、赤、紅紫、紫、白、覆輪などがある。



図6 ヒラドツツジ「曙」

‘大紫’や‘曙’などの品種は、花が大きく華やかというだけでなく、成長が早い上に、排気ガスや煤煙などの公害に強く、耐潮性や耐暑性にも優れるため、庭園や公園をはじめ、街路樹や工場周縁部などの様々な場面で植栽に用いられている。

長崎県平戸市は、古くから大陸貿易や南蛮貿易の中心地として栄えた港で、貿易船とともに外国の珍しい植物が入っていた。多くの貿易品とともにウメ、チャ、カンショ、カボチャなどの植物も平戸を通して導入されている。ツツジ類では、中国産のシナヤマツツジ、琉球産のケラマツツジ（朱色系の品種はこの血が濃いと考えられている）、日本産のキシツツジやモチツツジなども平戸に入り、武家屋敷と一緒に植えられていた。同じ屋敷内に、あるいは近所の庭に国内外の様々なツツジが植えられ、平戸の温暖な気候がツツジ類の実生の生育に適したため、自然交雑で生じた種間雑種の個体が難なく成長し、さらにそれらが自然交雑して新たな実を生じ、それがさらに、という複雑な交雑が長い年月の間に繰り返され、現在見られるような大型で華麗なツツジの一群が成立したものと考えられている。

「ヒラドツツジ」の名は、『和漢三才図会解』（1712大阪）に初めて見られるが、これは現在

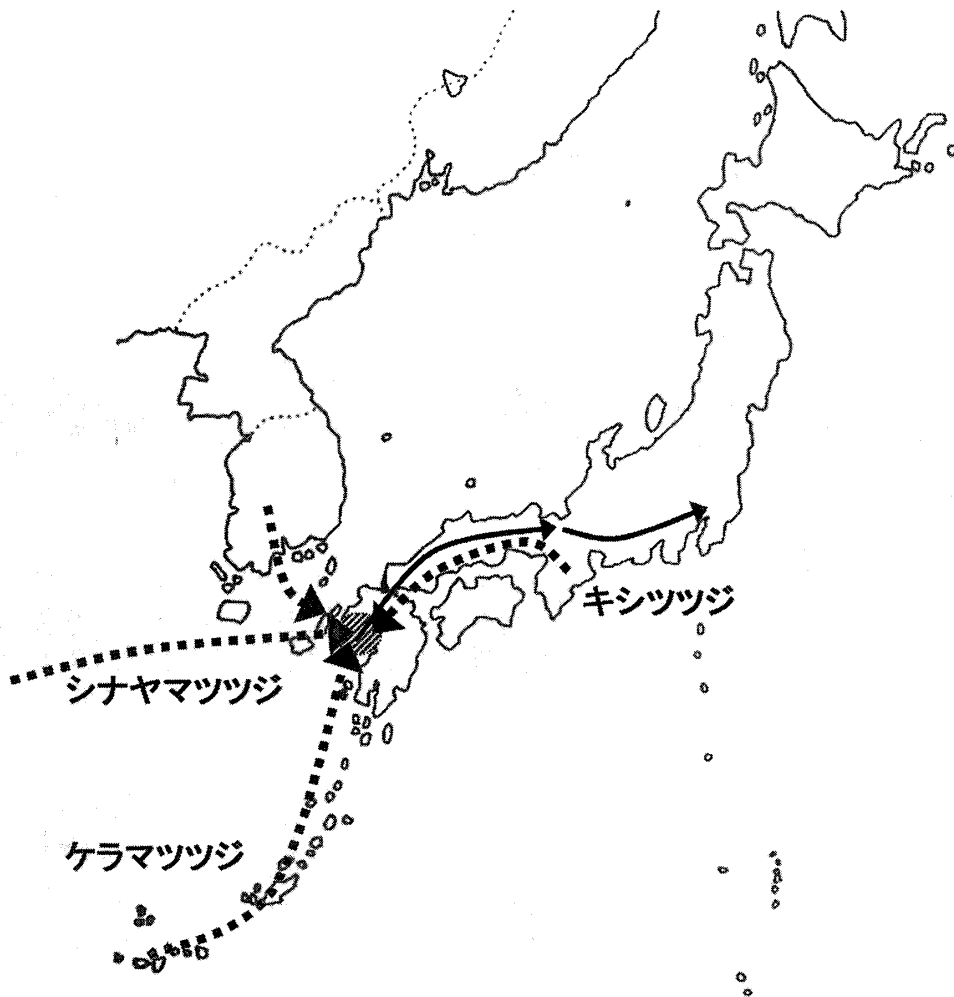


図7 「ヒラドツツジ」に関与する野生種と園芸化の経路

のシロリュウキュウ (*R. mucronatum*) と考えられている。「ヒラドツツジ」の名称は、正式には昭和26年(1951)に農林省園芸試験場と長崎県総合農林試験場が中心になり、それまで把握されていなかった平戸の武家屋敷の自然発生実生個体群を調査し、全体から優良個体を選抜し品種として絞り込んだ際に命名されたものである。

現在も造園用などに広く用いられている‘大紫’は、江戸時代にはすでに栽培されていたことが、ウィルソンらがヨーロッパに送った腊葉標本や図書の記録から知られている。『錦繡枕』(1692)に記された‘大きき紫’が‘大紫’であり、古く‘白平戸’‘紅平戸’‘紫平戸’などと呼ばれたものが、現在の‘大紫’‘白妙’‘曙’などの品種であると考えられている⁵⁾。

「サツキ」

「サツキ」はサツキとマルバサツキ、その2種の種間雑種を主として改良された園芸品種群で、他のツツジ類が旧暦の4月頃開花するのに対し、5～6月の五月きつきの候に開花する。花は概ね大輪で、一枝の着花数は他のツツジ類と比べ少ないが、突然変異体が生じやすく、花に筋状の模様が入る「絞り咲き」や、花の中心部が白く抜ける「底白」、花弁の縁が白く抜ける「覆輪」など、花模様の多彩な品種が多い。また、花色も紅色や錫色、紫系など幅が広く、形も花弁が丸みを帯びた梅弁や、先端の尖った剣弁、采咲き、八重咲きなどがあり、その品種数は2000とも5000品種とも言われている。

「サツキ」の名が初めて登場するのは花道の『生花伝書』(1632)で、ツツジと区別して扱われるようになったのは江戸時代中期以降である。『花壇綱目』(1681)では「サツキ」と思われる数品種がツツジとして記されているのみで、文献上の「サツキ」栽培は江戸時代中期以降に始まったとされている。しかし、それからわずか11年後の『錦繡枕』(1692)では「サツキ」の品種が161記載されており、人工授精技術のなかった時代にわずか11年で161もの品種を作り得たとは考え難く、江戸時代以前も京都などで庭に植えられ、栽培・改良されていた品種が数多く存在していたと考える。

「サツキ」の江戸時代からの品種(古花)は、「花は紅色、雄蕊は5本、葉が細長い」サツキを起源とする系統と、「花は紫色、雄蕊が10本、葉が丸い」マルバサツキを起源とする系統、および「それらの中間型」の系統にわけられる。サツキは福井、長野、神奈川から西に分布、マルバサツキは九州南端の開聞岳を北限に、種子島、屋久島、中之島などの島々に分布する。

サツキの、変化に富む形質や、突然



図8 サツキ ‘上の山麒麟’

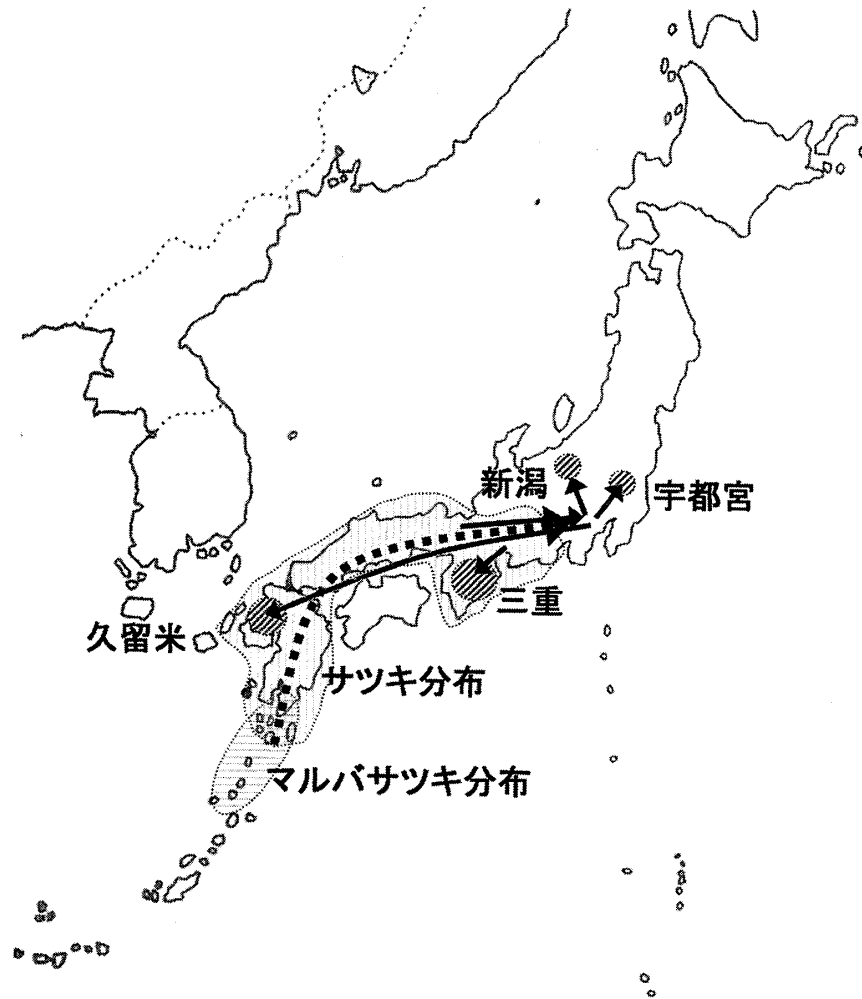


図9 「サツキ」に関する野生種の分布と園芸化の経路

変異の起こりやすさは、マルバサツキの交雑が関係しているといわれ、サツキとマルバサツキの分布が重なる屋久島では、両種の自然交雑と思われる中間型の個体や、突然変異体が見られることが知られている^{1) 2) 6)}。

屋久島は奈良時代の頃から本土と交流のあった島で、江戸時代には特産の屋久杉が、島津藩から「さつま杉」の名で大量に本土に積み出されている。キリシマを本土に送り出し江戸時代のツツジブームを引き起こしたとも言える薩摩の人々が、「さつま杉」の取引きの過程で、屋久島の花の変化に富むサツキに目をつけ、「さつま杉」の搬出ルートを通じて江戸に送ったであろうことが想像される。また、『錦繡枕』に「さつま紅」が記されているが、この品種によく似た形質のサツキが屋久島東北部で見られること⁶⁾、屋久島の杉を「さつま杉」と名づけ出荷するのならば、屋久島のサツキに「さつま紅」と名づける可能性は高いであろうと考えられることから、「さつま紅」は屋久島産のツツジであると推測される。

江戸時代末期になると、園芸が観賞性よりも希少性を重視するようになり、斑入りや変わりもの、珍品が高額で取引されるようになる。これは、江戸末期に起きた大飢饉の影響で、貧富

の差が大きくなり、庶民が園芸を楽しむ余裕がなくなったためといわれる。ツツジ類も例外ではなく、この頃に出回った品種の特徴は、斑入り、矮性、枝垂れ、ねじれ、帯化などで、花や姿の観賞価値ではなく、投機的価値を評価していたものと考えられている。

明治に入り、欧米の植物や栽培技術が入ってくると、サツキも欧米化し、人工交配技術が導入され、アザレアなど海外の品種群との交配品種が多数生まれた。

明治中期になると、染井や大久保などの都内の生産地は衰退してゆく。それに代わって安行や宇都宮、久留米、新潟などの地方の生産地が勢いを増した。

大正時代になると、宇都宮から鹿沼周辺に分布する鹿沼土がサツキの栽培に適することがわかり、鹿沼、宇都宮のサツキ栽培が急激に増えた。

現在、造園用のサツキ苗の多くが、三重県で生産されている。三重でのサツキ苗生産は、明治の初期に尾張の植木産地から入植した人々により始まったとされ、大久保百人町の伊賀組との関係性について言及する研究はない。しかし、その地理的条件や歴史的関連性を考えると、何らかの関連性がある可能性が高いが、今回の調査では結論を得ることができなかった。

V. まとめ

「キリシマ」「江戸キリシマ」「クルメツツジ」「ヒラドツツジ」「サツキ」の園芸ツツジについて、その来歴と伝統的園芸植物としての成り立ちについて調査を行った。その結果、以下のことがわかった。

- ① 全ての品種群が、九州から屋久島に自生していた自然交雑実生から「選抜した個体」が関与している。
- ② 江戸時代まで、日本には人工交配の知識も技術もなかったため、江戸時代までの品種群の成立は、自然交雑に頼っていた。
- ③ ①の個体が自生していた地域は、屋久島も、霧島山も、平戸も、複数の野生種が混生し、種間雑種が発生する可能性が高い環境にあった。
- ④ 今回調査した品種群には関与しなかったが、九州には他にも同じツツジ亜属（近縁種＝種間交雑親和性が高い）のチョウセンヤマツツジ、ウンゼンツツジ、フジツツジが分布し、ヤマツツジの分布と重なっている。自然交雑、あるいは人為的交配による新たな品種群育成の可能性が考えられる。
- ⑤ 今後、他の伝統園芸植物について調査するうえで、種の分布域、自然交雑種間雑種の関与を確認する必要がある。
- ⑥ 調査の過程で、伊勢津藩藩主藤堂家に仕えた染井の伊藤伊兵衛、大久保百人町の伊賀組、明治以降の三重のサツキ生産に、三重県という地理的共通性を見出すことができたが、三者の関連性について結論を得ることはできなかった。

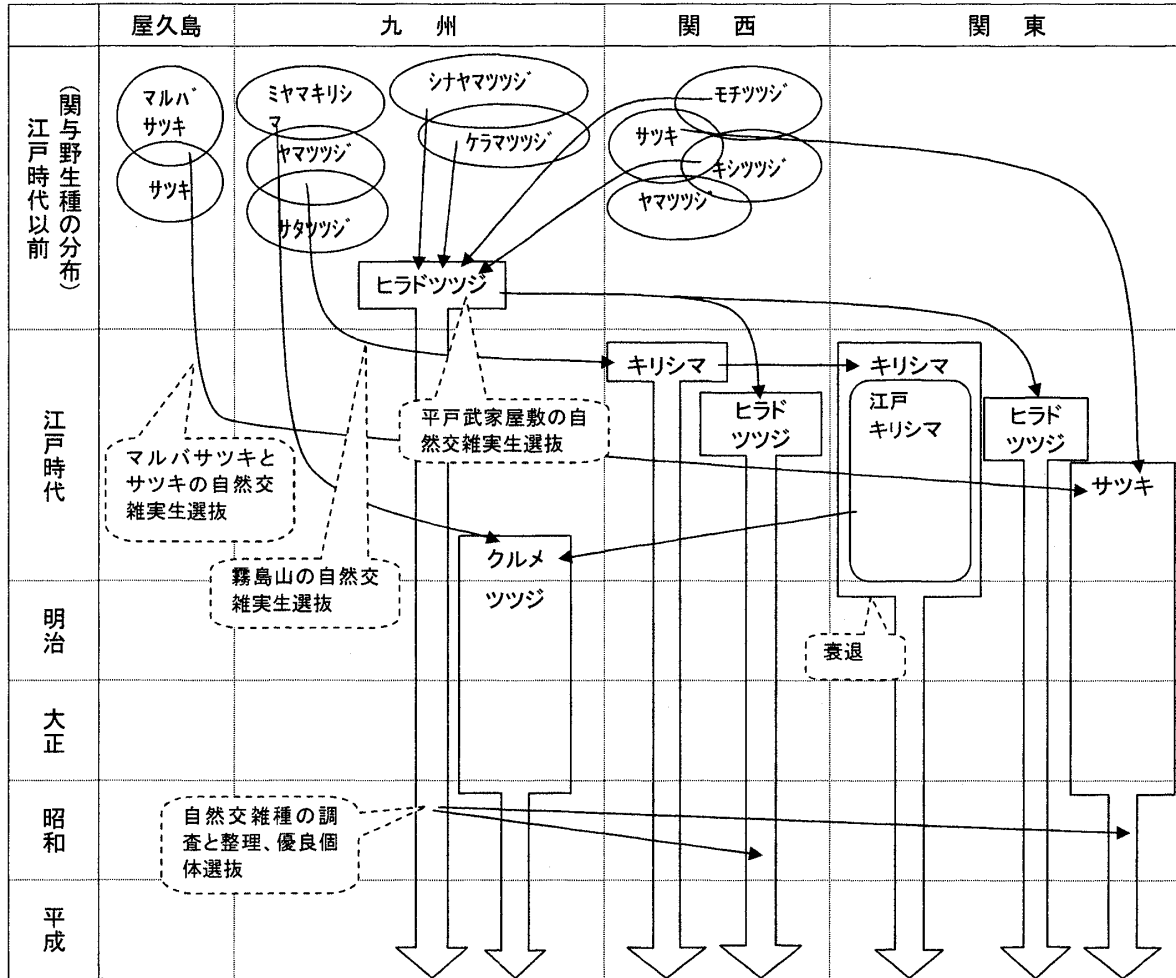


図 10 園芸ツツジ品種群の経緯

参考文献

- 1) 小林伸雄 (1996) 「常緑性ツツジの類縁関係と園芸品種の起源解明に関する研究」筑波大学学位論文
- 2) 宮島郁夫 (1988) 「九州における常緑性ツツジ類の形質変異に関する研究」九州大学農学部報告論文, pp 1-131
- 3) 宮沢文吾 (1918) 「キリシマツツジの起源」植物学雑誌32, pp318-331
- 4) 熊澤三郎 (1975) 「平戸ツツジの成立とその歴史」ガーデンライフ5, pp19-23
- 5) 国重正昭 (1974) 「わが国のサツキ園芸品種—その来歴と特性—」農業および園芸49 (5), pp681-686
- 6) 赤羽勝 (1988) 『皐月の発達史』日本放送協会学園
- 7) 『日本の野生植物 木本Ⅱ』平凡社, pp122-156, 1989
- 8) 伊藤伊兵衛 (1976) 『錦繡枕 (復刻版)』青青堂出版
- 9) 宮沢文吾 (1940) 『花木園芸』養賢堂
- 10) 小笠原亮, 山口安久 (2005) 『伝統園芸植物と盆栽—器の取り合わせと席飾り—』日本放送出版協会
- 11) 青木直己 (2005) 『幕末単身赴任 下級武士の食日記』日本放送出版協会
- 12) 「久留米のつつじ」葦書房 (1989)